

『Abhisamayālaṃkāra』の三身説と四身説

磯 田 熙 文

一

『Abhisamayālaṃkāra』第八章即ち行果としての〈法身現等覺〉に述べられる仏身論は、恐らく、自性身（法身）・受用身・化身の三身説が本意であったろうと思われるが、本偈自体が簡略なためもあって、三身説にも四身説にも読み取ることが可能である。

この『Abhisamayālaṃkāra』の注解者として、また宣揚者として中心的な人物であった Haribhadra（八世紀後半～九世紀）が、その著『八千頌般若注解・Ālokā』、及び『Abhisamaya 注解・Sphuṭārthā』において、この果・法身現等覺を特色ある四身説をもって解釈したことは、既に詳しい紹介と位置づけの試みがなされている¹⁾。唯、この四身説が、Haribhadra 自身の創説かどうかという点には疑問が残されている。が、少くとも、彼以後に、インド・チベット等においてこの四身説に対する賛否と三身四身いずれかの説の選択がなされていたことが、諸注解書から知られる²⁾。

ここでは、Haribhadra が引いている、三身・四身両説に関する議論、論難・応答において、彼自身は誰であるとも具体的な人名を挙げてはいないが、後の注釈者達が特定している人名を拾い出して、多少の比較検討を加え、更に、この四身説の意義、位置について、その一端を伺いたい。

二

特定されている人物名は、Āryavimuktasena, Mkhan po yañ dag Rnam snañ mdsad (bzañ po), Jñānacandra の三人である。

Āryavimuktasena に関しては、『二万五千頌般若注解・Ñi khri snañ ba』(Toh No. 3787, Ota No. 5185) が残されているので、自性身・受用身・化身の三身説を採って解釈していることが確かめられる。

Haribhadra は、『Ālokā』、『Sphuṭārthā』に、

「他の人々は、

牟尼の自性身は、一切相にわたって清浄となった、無漏なる法、それら(無漏法)の本性を特質とするものである、

(VIII, 1)と説かれる語のままに出世間、無漏の諸法を認めて、自性身はそれらの自性不生性、それを特質としているのであるが、まさにそれは法性身(dharmatā-kāya)であって、(その)接尾辞の -tā の省略脱落によって、法身(dharmakāya)と表現される、と解説し、更に、それらの本性を特質とする法身、それら無漏なる法は如何なるものかという疑問を受けて、

菩提分法・無量……(VIII, 2-6)

を転ずる、という。』³⁾

と引用する説は、Bu ston が指摘⁴⁾するように、『Ñi khri snañ ba』の所説である⁵⁾。しかし、後に触れるが、Dharmamitra は、『Sphuṭārthā』の復注である『Prasphuṭapadā』に、これを Mkhan po yañ dag Rnam par snañ mdsad の主張であるという⁶⁾。即ち、Mkhan po Rnam snañ mdsad は三身説を説く者とみなすわけである。

この Mkhan po (Upādhyāya) yañ dag Rnam snañ mdsad (Vairocana) (bzañ po, bhadra) に関しては、本学会の発表後に、Nyi chang Rin po che 師から、この Mkhan po Rnam snañ mdsad とは Śāntarakṣita を指す旨、教えていただいた⁷⁾。Rñiñ ma 派の伝承によるものであろうか。しかし、直前に引いた Dharmamitra にしても、Bu ston, Sa skya 派の G-yag phrug (sañs rgyal dpal, 1350-1414)をはじめ、チベット人がこの名を引くが、Śāntarakṣita との結びつきには触れていないようである。Tāranātha の『インド仏教史』30章に、Haribhadra は、「Ācārya Śāntarakṣita から中観の諸論典と教誡を聴聞され、この Upādhyāya Vairocanabhadra に『般若経』を『Abhisamayālaṃkāra』と共に聴聞された。』⁸⁾と云い、ここでも両名は別人と考えられている。ところが、Dharmamitra は、次の様な‘有説’を引いている；

「ある人は云う：阿闍梨(Haribhadra)御前は他の本文に、三身を述べているから、(この第八章の注で、四身を)お認めになっても、これは Mkhan po yañ dag Rnam snañ mdsad の教えを重んじられて、彼のご主張を布置したのである、という。』⁹⁾

とし、更に、

「仏身の数の決定に関しては、各々別個に説く見解のいずれも否定しないから、この様に(四身と)定めることは如何なる場合もない。従って、阿闍梨(Haribhadra)御前は何身を建立しても過失がないとお認めになっていることは明らかである。』⁹⁾

と。Tson kha pa は、これは大・小二注即ち『Ālokā』と『Sphuṭārthā』の意趣としては不適當である、という¹⁰⁾。しかし、〈波羅蜜乘—三身・四智、真言乘—四身・五智〉の伝統的な定説を持つ Sa skya 派において¹¹⁾、例えば、Roñ ston (Śa-kya rgyal mtshan dpal bzan po, 1367-1449) は、次の様に Dharmamitra の有説と同趣旨の解説をする:

「『Abhisamaya』本偈の意趣は三身である」¹²⁾

と述べて、次いで、

「阿闍梨 (Haribhadra) は四身を立てられるが、Upādhyāya Vairocana 等のお言葉によって、自身の見解の様にみえる(説)として布置しているのであって、ご自身は定んで三身説である。『Ālokā』に、〈一切種の最勝たる三身を定んで得るものたらんことを〉¹³⁾と説かれているからである。」¹²⁾

等と云う。即ち、Haribhadra の師としての Vairocana が般若アビサマヤを口伝で教示する際に四身説を説いたと伝える有説のあったことが知られる。Vairocana が Śāntarakṣita と同一人であるならば、Śāntarakṣita が三身説を、あるいは四身説を説いたかどうか、sarvajña の論証、勝義・(瑜伽行者の)世俗の二諦説を含めて、今後の課題となる。

Jñānacandra に関しては、Tāranātha の『インド仏教史』29章に、八世紀の中頃即ち Haribhadra と同時代の年長にあたる人々のうちに数えられているが¹⁴⁾、他の史書類には触れられていない様であり、不明である。彼の著作として、チベット大藏経に、

1. 『Kāyatraya-vṛtti』(Toh No. 3891, Ota No. 5291)
2. (『Yogacaryā-bhāvanārthasamāsa (or bhāvanātātparyārtha)-nirdeśa』(Toh No. 4077, 4546, Ota No. 5460, 5578))

の二書が収採されている。Nāgamitra (或いは Nāgasena 作: 『Kāyatrayāvatāra-mukha』(Toh No. 3890, Ota No. 5290) は、『Uttaratantra (究竟—乗宝性論)』に見られる様に、法身を中心にしながらも、唯識の三身説を色濃く持ち込んで解説したものであり¹⁵⁾、155 偈よりなる。1. は、この偈論に対する注解であり、2. は 1. の 102~106 偈の注解部分を別出して一書としたものに過ぎないから、Jñānacandra の著作としては、一書即ち 1. のみであり、しかも、これは『デンカルマ』¹⁶⁾をはじめとする目録類に、中観部所収となっている。しかし、これも、八世紀以後の仏教が瑜伽行・中観を殊更に分けるよりも、両者が相補いつつ大乘(波羅蜜理趣)の体系化を目指して工夫されたということからすれば、奇とするに及ばな

いことかもしれない。

ところで、2. が特に別出され、重んぜられたのは何故か。この内容は、先ず、常・断の二辺を離れて、中道に精進すべきことを説く、この中道は唯識性 (vijñāptimātrātā) に他ならない。この唯識を正しく見る、即ち能・所二取の分別を離れることにより、無分別・無功用智が生ずる。この能所不二により一切は如夢である。この様に顛倒を除くことに尽きる。最後の 106 偈に、

事物の如何なるものも、添増せず、除去さるべきものもない。法の自性・真如のみを見ることによって解脱する //

と説かれている。簡潔に、唯識から如幻不二観による解脱論が説かれていることによるのであろう。それは兎も角として、Jñānacandra は、106 偈に注解する際に、次の偈を引用している；

ḥdi la bsal bya ci yañ med / / bshag par bya ba cuñ zad med / / yañ dag ñid la yañ dag lta / / gañ dag mthoñ nas rnam par grol //

この偈文は、同内容の散文も含めて、多くの論書に引用されていることが指摘されている¹⁷⁾。それらに、更に加えるならば、『中観宝燈論』(2回)¹⁸⁾、Tripitakamala の『三理趣燈』¹⁹⁾ などにも、いずれも‘竜樹曰く’として引かれている。従って、この偈が竜樹に帰せしめられるのは九世紀頃かそれ以後のことと考えられるが、Jñānacandra は偈文を引くのみであり、それ以上の手がかりを与えてはくれない。

さて、『Abhisamayālaṃkāra』は、第 1 偈に自性身の定義を述べ、第 2～6 偈までの 5 偈に、『二万五千頌般若』所説の〈菩提分法〉など 21 部 (or 23 部)、計 144 (or 146) の無漏法を挙げて、〈これらが法身である〉と述べているが、この無漏法の聚即ち法身に関して、Haribhadra は、『Sphuṭārthā』に、

「転依によって (一切の有漏を) 無漏に転じた、無戲論の智を自性とする、すべての菩提分法などは、また、『Ālokā』では、ここに〈第二の〉が入る) 法身であるといわれる、とある人々は云う。」²⁰⁾

と有説を引いているが、これが誰であるのか注釈者達の間で一定していない。

Dharmamitra は、この説が、

「自性身と法身の二つは一つと認めるから二つに分けられないと説くもので、阿闍梨 Jñānacandra 等の説 (siddhānta) である。」²¹⁾

とする。Bu ston²²⁾は、Vairocana、あるいは Jñānacandra、G-yag phrug²³⁾は Vairocana、Roñ ston²⁴⁾は Vairocana と Jñānacandra であるとする。この有説の一

文を三身説と取る Dharmamitra に従う限り、Tson kha pa 等が Vairocana に Haribhadra をも含めて挙げる²⁵⁾ことは不適當である。

以上、Haribhadra が行果・法身に関して採った四身説に基づく解釈は、Vairocana (Śāntarakṣita) に依るものであるという伝承があったことを知りえたが、事実、『Āloka』、『Sphuṭārthā』の第八章以外の注解では、法・受用・化の三身のみが引き用いられている。例えば、

「(この無上正等菩提は) 真如であるとは、真如の自体 (tathatā-svarūpā) であり、如来の自性は、如幻無戲論の智を本性とする法身等よりなる。」²⁶⁾

「仏世尊は、如幻不二智の自性・般若波羅蜜を自性とする法身(を持ったもの)である。」²⁷⁾

「一切智者の智たる法身の……。」「²⁸⁾あるいはまた、

「法身の威力によりは、法界と等流なる般若波羅蜜の威力によりという意味である。」²⁹⁾

「勝義の身 (śarīra) 即ち法身」³⁰⁾

とも注解せられる。しかし、自性身の語は一度も用いられていない。これらの注解例からは、第八章の解釈にみられる〈自性身と余の三身〉という四身説は予想できない。

三

そこで、Haribhadra が、自性・受用・化の三身に対して、〈無漏法の自性であり、不生を性質とし、不改作性 (akṛtrima) である‘自性身’と、これを根拠として成立する無漏法及び智よりなる法身、更に受用身・化身(即ち余の三身)〉という構造を持つ四身説を主張する根拠・理由は、四身説を採る人々の(三身説・の)問難に示されているが³¹⁾、Haribhadra 自身の法身の定義においても確かめることができる；『Ālokā』第一章に、

「定んで認められなければならぬものとして、瑜伽者の世俗上、殊勝な対象として顕現を生ずる門より、転依によって(無漏に)転じた、説法等の利益行をなす、(所取・能取)不二の、すべての種類の心心所は、まさに諸如来の行境であり、智資糧より生じた、有事業の法身である。」³²⁾

これは、G-yag phrug の言葉を借りれば、

「止観双運の瑜伽者、考察に耐え得ない世俗の上から、殊勝な境としての受用身と化身の顕現を生起する門から、所化に対して、最初に説法、中間に道に布置すること、最後に果に布置することといった利益ある所作をなせる、また、すべての有漏を無漏に転依

した、仏地において定んで認められなければならない、所取・能取不二の心心所の智が（利他行の依持として要請された）。¹³³⁾

ということであるが、この『Abhisamaya』に Haribhadra が採った四身説に対して、先に触れた様に、波羅蜜乗—三身、真言乗—四身という教理上の定説を侵し破るという非難がなされる；

『Abhisamaya』第一章の最初に、八現觀の内容を要約して述べるが、第八章の細分項目に関して、

自性と受用と、同様に、他の化（身）³⁴⁾、有事業の法身との四種と述べられる // (I. 17) と説かれるが、Haribhadra はこの偈に関して、『Ālokā』に、三身説側からの主張と、四身説側からの救釈を挙げている；

「ある人々は、もし四身ならこの偈において、〈自性身〉の次に〈法身〉の語が来（べきであるが）ないから、身は三に他ならない、という。

しかし、他の人々は、目的を明瞭に示し尽くす力により、偈の結びつきに応じた形で、まさに智（法身）と（二十七）事業を結びつけるために、この様に (I. 17) 説かれているのである。従って、他の（主張・問題）個所（pradeśāntara）に説かれている四身説のすべてと矛盾のないこととなる、という。³⁵⁾

ここに云う ‘pradeśāntara’ に関して、Dharmakīrtiśrī は、‘luñ dañ luñ ma yin pa dag las’、Dharmamitra は、逐語釈を加えていない。しかし、Abhayākara-gupta は、真言理趣を含意するものと取り、Haribhadra が〈波羅蜜〉と〈真言〉を混同し、この四身説は Haribhadra のその様な恣意によるものに外ならないとして強く非難する³⁶⁾。

確かに先述の理由をもって分けられた四身説の構造が、無上瑜伽密教の展開の過程において、例えば、〈法身・受用身・化身・自性身〉等として用いられ解釈されている³⁷⁾。しかし、Haribhadra には、タントラ（真言理趣）に関する著作は何ら残されていないので彼の真意は確かめられぬが、少くとも、Dharmakīrtiśrī；Dharmamitra の復注は共に真言理趣との関わりに触れていない³⁸⁾。Abhayākara-gupta の非難は、あるいは、本末顛倒であるのかもしれない。

1) 天野宏英「ハリバドラの仏身論」, 宗教研究 179, 昭 39, pp. 29-57.

2) Dharmakīrtiśrī, Dharmamitra, Prajñākaramati, Kumāraśrī などは少くとも、四身説を支持するが、Śānti-pa, Ratnakīrti, Abhayākara-gupta は三身説を採る。

3) 『Ālokā』Wogihara (W) 本 p. 916, II. 6-13. 『Sphuṭārthā』Amano (A) 本 p. 269.

4) 『Luñ gi sñe ma』(Toh No. 5173, 343b⁴-44a¹).

- 5) Toh 191b⁷-192a⁶, Ota 226a⁶-b⁷. Bhadanta vimuktasena の『二万五千頌般若注解・Vārttika』(Toh No. 3788, Ota No. 5186, 184b¹-185a⁸) も三身を採る。
- 6) Toh No. 3796, 100a⁷.
- 7) Śāntarakṣita が 'Bodhisattva', 'Mkhan po Bodhisattva' の名称で呼ばれることは, Bu ston の伝えるところであるが, 羽田野先生は Mkhan po としての Śāntarakṣita が瑜伽行・菩薩律儀を採った点に注目された(瑜伽行派の菩薩戒をめぐって『鈴木學術財団研究年報』14, 昭52, pp. 28-33.)。8) Tāranāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione, ed. A. Schiefner, p. 166.
- 9) 「kha cig na re, Slob dpon gyi shal sña nas ni gshun gshan du sku gsum du bstan pas de ltar bshed mod kyi / ḥdi ni Mkhān po yañ dag Rnam par snañ mdsad kyi / gdams ṅag gtso bor mdsad pas na / de yi bshed pa bkod paḥo / shes zer te / ḥog nas skuḥi grañs ṅes par cha dad pa bstan paḥi lugs gañ yañ sun ma phyun bas na / de ltar ṅes pa ni ci yañ med de / Slob dpon gyi shal sña nas ni sku dur bshag kyañ / ṅes pa med par bshad par gsal lo」(『Prasphuṭapadā』 Toh. 94b⁵⁻⁷, Ota 110a).
- 10) 『Legs bśad gser phreñ』 Toh No. 5412, Ota No. 6150, 305b-6a.
- 11) 例えば, Bsod nams rtse mo (1142-1182) 『Rgyud sde spyiḥi rnam par gshag pa』に, 「pha rol tu phyin pa las sku gsum las ma bśad la / gsañ sñags las sku bshi dañ lña bśad pa dañ /」(64a¹). (cf. Go rams pa (1429-1489) 『Śes rab kyi pha rol tu phyin paḥi man ṅag gi bstan bcos Mñon rtogs rgyan gyi gshuñ sña phyiḥi ḥbrel dañ dkaḥ gnas la dpyad pa sbas don zab moḥi gter gyi kha ḥbyed』315a⁵). また, Sa skya paṇḍita Kun dgaḥ rgyal mtshan (1182-1251/25) は, 四身説について Haribhadra などの個入名には一切触れていない(『Thub paḥi dgoñs pa rab tu gsal ba』86b⁸).
- 12) 『Śes rab kyi pha rol tu phyin paḥi man ṅag gi bstan bcos Mñon par rtogs paḥi rgyan ces bya baḥi rnam bśad tshig don rab tu gsal ba』; 「rtsa baḥi dgoñs pa ni sku gsum kho nar gnas te」, 「Slob dpon gyis sku bshiḥi rnam gshag mdsad paḥaṅ Mkhan po Rnam snañ mdsad la sogs paḥi bkaḥi dbaṅ gis rañ lugs ltar⁴ snañ du bkod pa yin gyi / rañ lugs ṅes pa ni sku gsum ste / Ḥgrel chen las / rnam pa kun gyi mchog ldan sku ni gsum po thob par śog / ces pas so」(New Delhi, 1973, 551², 8⁻⁴).
- 13) 『Ālokā』W 本 p. 994, I. 3. 「sarv'ākāra-varā bhavantu niyatam kāya-traya-prāpinaḥ //」. Tson kha pa は, これは「有法の三身を意趣して, 余の三身ということであって(三身説ではない), という(Ota 306a)」。14) A. Schiefner, op cit. p. 162.
- 15) 浜野哲敬, 『三身入門論』について, 印仏研 32-2, pp. 162-3. 16) Toh No. 4364, 307b³; Ota No. 5851, 369b²⁻³.
- 17) Jikido Takasaki; A Study on the Ratnagotravibhāga, Roma, 1966, pp. 300-301. (nāpaneyaṃ ataḥ kimcit prakṣeptavyaṃ na kimcana / draṣṭavyaṃ bhūtato bhūtām bhūtadarśi vimucyate / (W • 885, 16-17) 『Abhisamaya』V. 21)。

- 18) Toh No. 3854, 262a⁵, 281a⁵⁻⁶, Ota No. 5254, 329b⁴⁻⁵, 354b¹⁻².
- 19) Toh No. 3707, 21b¹, Ota No. 4530, 22b⁸-23a¹, ここでは、「貪欲などが捨てられるべき、あるいは、離貪などは受持されるべきである、というのではなく、唯、無顛倒の真実のみを証得することから、真実を見るであろう、無顛倒の智によって解脱する。この意味は阿闍梨竜樹御前が次の様に説かれる、」としてこの偈を引き、更に、「この世で大慈悲を持ち無顛倒のお心を持つ人々は、如何なる活動であろうとも、そのすべてが方便と般若に摂持されているから、何からも顛倒することはない。従って、世尊はすべての有情の意樂と随眠をお知りになって、真言の (kriyā 等の) 四種の論書を説かれた^o」と説明し、この偈が四部タントラ成立の根拠として用いられている。
- 20) A 本 p. 269. 21) Toh 100a⁶⁻⁷, Oa 116b. 彼はこの説も含めて Upādhyāya Vairocana の説であるとしている。25) Ota 322b⁵⁻⁷.
- 26) 「tathataiṣeti tathatā-svarūpā māyopama-niṣprapañca-jñān'ātmaka-dharmakāy'ā-dimaya-tathāgata-svabhāveti yāvat. (W 本 p. 714, II. 27-8)。
- 27) 「dharmakāyā māyopamādvaya-jñānasvabhāvāḥ prajñāpāramit'ātmaka buddhā bhagavanta iti」(W 本 p. 268, II. 12-13)。
- 28) 「sarvajñajñānasya dharmakāyasya.....」(W 本 p. 212, I. 2)。
- 29) 「dharmakāyānubhāvād iti dharma-dhātu-nisyande-prajñāpāramitā 'nubhāvād ity ar thaḥ」(W 本 p. 278, II. 3-4)。
- 30) 「pāramārthikam śarīraṃ dharmakāyaḥ.」(W 本 p. 268, I. 2)。31) W 本 p. 916, II. 14-16, A 本 p. 269. 32) W 本 p. 20, I. 28-p. 21, I. 2。
- 33) vol. 2, 349²⁻⁴, 「shi lhag zuñ ḥbrel du yod paḥi rnal ḥbyor pas dpyad mi bzod paḥi kun rdsob tu don khyad par can loṅs spyod rdsogs paḥi sku dañ sprul paḥi skuḥi snañ ba bskyed paḥi sgo gdul bya la thog mar chos ston pa dañ / sogs pa bar du lam la ḥgod pa dañ / mthar ḥbras bu la ḥgod paḥi don gyi bya ba md-sad pa spañs pa zag paḥi phuñ po ma lus pa gnas gyur pas zag med du gyur pa / ŋo bo gzuñ ḥdsin gñis su med paḥi sems dañ sems las byuñ baḥi ye śes sañs rgyas kyi sa la gdon mi za bar khas blañs dgos pa rnams sku gsum du ji ltar bsdu /」。
- 34) 〈他の化(身)と(dañ)〉と読むか、〈他の化(身)が(ni)〉と読むかによって、四身と三身とに分かれる。35) W 本 p. 916, II. 28-30。
- 36) 「Abhayākara Gupta の Haribhadra 批判」, 印仏研 30-2, pp. (33)-(34)。
- 37) 「pāramitā-yāna と mantra-yāna」, 東北大・文・研究年報 28, p. 129。
- 38) Buddhasrijaṇa は、『Samcayagāthapañjikā (宝徳藏般若難語釈)』において、三身・四智を挙げて、「Mahāyānasūtrālaṃkāra」安慧釈と軌を一にする注解を付するのみで、四身には触れていない (Toh No. 3798, 188a^{1-b}, Ota No. 5196, 221b³-222a⁶)。

(東北大学助教授)